

発想力

2022. 8. 30

発想力という言葉がある。子どもたちに発想力をつけてほしくないという人はいるだろうか。たぶんいないだろう。あるいは、かなり少数派であろう。ということは、発想力には肯定的な要素があるということである。

では、発想力を鍛える秘訣は何か。答えはわからない。だが、一つだけ言えることがある。「できない」とか「無理」と言わないことである。そう思わないことである。

学校に勤務し、教員をやっている。以前から気になることがある。「できません」「無理です」というフレーズを耳にする。最初からあきらめている。自分で自分の可能性を閉じ込めている。きっと自分の経験と知識からそう判断しているのだろうが、やってみなければわからないこともある。あるいは、苦勞するのが嫌なのだろうか。

気になるのは、こういったタイプの人子どもたちに与える影響である。すぐにできないと判断する人が、子どもたちに発想力を求めるのはどうなのであろうか。実は、こういったことがよくあるように思う。それは、教員という立場、親という立場でも見られる。

いくら子どもたちに発想力は大切ですよと言ったとしても、言っている本人がそうではないタイプの人間では、何も伝わらない。子どもたちは何も感じない。それよりも、自分が発想力を大切にしていれば、自然と伝わるものである。影響を与えるものである。

これは、主体性や積極性にも当てはまる。思いやりなどもそうかもしれない。子どもたちにそうなってほしいと思うのであれば、まずは自分がそうなるべきである。

我がことを振り返ってみる。「できません」「無理です」とは言わないタイプだと思っている。「それは無理だな」と立場上、考えることはある。だが、内心は、無理かもしれないが、どうにかしてできないだろうかとアイデアをひねり出している。もっとこうすればいいのではないかと、こんなことができるのではないかと考えている。

自分では発想力があるなどとは思っていない。世の中には、実に豊かな発想力を持った人がたくさんいる。そういった人たちが社会を動かしている側面もある。学校の先生は、子どもたちの発想力の妨げにはなっていないだろうか。中には、教員よりも発想力を備えている子どもたちもいる。そういった子どもたちをどんどん伸ばしたい。学校は、そういうことができる場所でありたい。

子どもたちは、少なからず先生の影響を受けるものである。中には、「できません」「無理です」というタイプの子もいる。それはおかしなことではない。自己肯定感が低く自信のもてない子どもが多い日本ならば、そうなるであろう。だからと言って、子どもたちと接する先生まで同じようなタイプではいけないだろう。

先生方には、自ら壁を突破しようとするエネルギーが求められている。先生方の自己肯定感を高め自信をつけさせることが自分のやるべきことのひとつである。